

玉名市文化財調査報告 第5集

浄光寺蓮華院跡出土品

1 9 8 0

玉名市教育委員会
玉名市文化財保護委員会

序

浄光寺蓮華院は「肥後国誌」によれば、遠く平安後期に建立された名刹であり、その建立の由来も歴史上重要な内容を秘めており、その後変遷の中にも貴重な文化財を残している。

特に昭和4年出土の鶴亀燭台をはじめ、布目瓦など学術上重要なものがある。

この度、蓮華院誕生寺の御理解により、文化財保護委員長田添夏喜先生はじめ各関係の方々の御尽力により保存し活用するため調査を実施され、ここに報告書の完成を見ましたことは誠に意義深く感謝に堪えません。

本書が今後学術研究の資料として活用され、さらに文化財の保存、愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

昭和56年3月

玉名市教育長 豊永義彰

目 次

浄光寺蓮華院由来	1
調査の対象として取扱ったもの	5
出土品の説明	5
調査を終って	14
図版41 浄光寺蓮華院遺跡	
(上) 現在の蓮華院誕生寺本堂	
(下) 浄光寺蓮華院五輪塔(閻白塔)	
図版42 浄光寺蓮華院境内出土遺物	
出土した仏具類	
図版43 浄光寺蓮華院境内出土遺物	
金銅仏頭1鉢	
図版44 浄光寺蓮華院境内出土遺物	
(上) 小仏像2鉢	
(下) 滑石勾玉1点	
図版45 浄光寺蓮華院境内出土遺物	
(上) 軒丸瓦と軒平瓦平	
(下) 丸瓦と平瓦片	
図版46 浄光寺蓮華院境内出土遺物	
(上) 瓦質火鉢の口縁部と同底部	
(下) 瓦質盤	
図版47 浄光寺蓮華院境内出土遺物	
(上) 土師質土器(燈明皿)	
(下) 青磁と白磁碗片	

浄光寺蓮華院

—熊本県玉名市築地2289の1番地—

(1) 浄光寺蓮華院由来



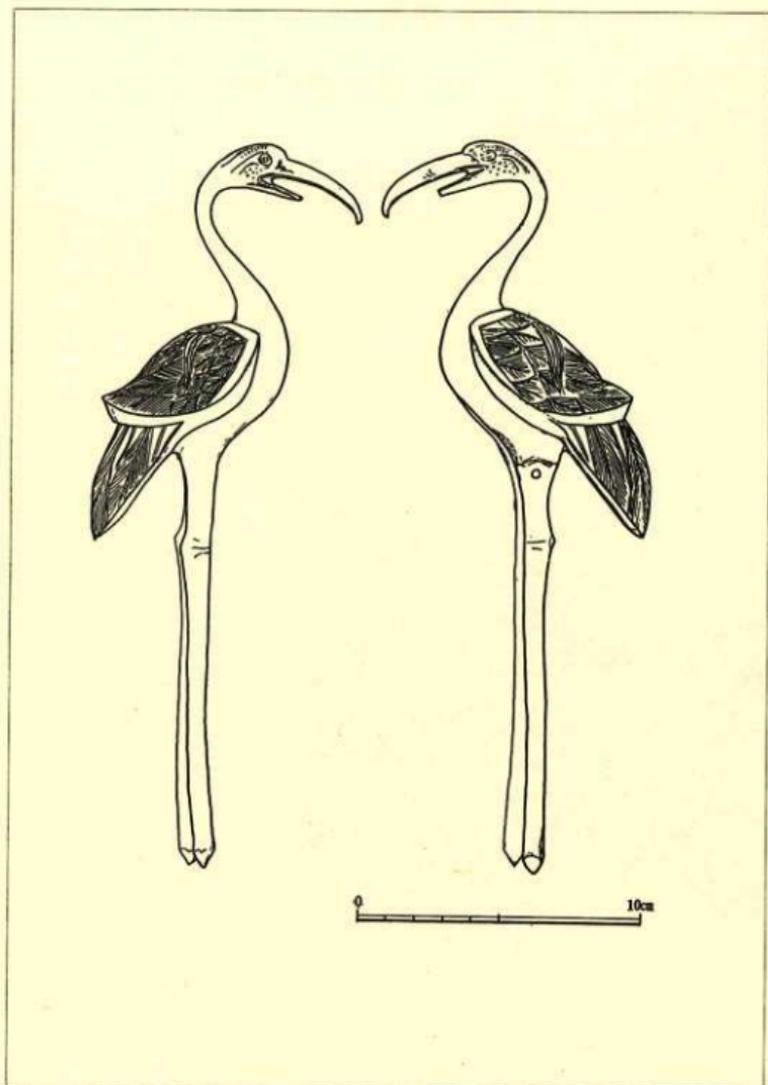
第1図 浄光寺蓮華院の位置

当寺院の由来については、肥後最古の史書とされる「肥後国誌」上巻、坂下手永、関白屋敷の項以下に次の通りの記事が出されている。

関白屋敷

土民ノ宅地並ニ広キ屋敷跡アリ、今ハ畠地トナレリ、里俗関白ヤシキト云其辺ニ南大門ト云所モアリ、亦林中ニ五輪塔石ニ基アリ、里俗ノ説ニ曾テ関白屋敷トハ称セス、旧昔小松内府平重盛公當國ヲ知行シ父清盛入道浄海天子ヲ奉懐騎奢日々ニ長シ、無道甚タシク家運此ニ谷リ終ニ一族滅亡メ後世善提ヲ弔フ人モ有ヘカラストテ唐土育王山ニ黄金ヲ送り猶モ此所ニ浄光寺蓮華院ヲ建立シ築地ヲ四方ニ築キ南ニ大門ヲ開キ父母滅罪ノタメニ五輪石塔婆ヲ建テ衆僧ヲ集メテ常住念仏三昧味ノ道場

タラシム、此所ハ即チ其ノ浄光寺蓮華院ノ院跡也、田地ノ地名ニ可舞台ナリト云ル其遺名也ト云、一説ニ此所ハ景行帝巡狩ノ時於干此腹赤ノ真名鏡タル鯛ヲ葛ノ葉ニ盛り毎朝獻ス、行宮方ニ築地ヲ築キ南大門ノ扉ヲ朝夕開閉スル音吉地山山本玉名ノ一ノ響キント云伝フ、



浄光寺蓮華院跡

法相又浄土又禪ノ古跡トモ云ヒ不分明年代モ未詳、里俗ノ説関白屋敷ノ条ニアリ、重盛此寺ヲ建立シ父母生前ニ二基ノ五輪塔婆ヲ建テ衆僧ヲシテ常住念仏ノ道場トシ寺産ノ地八町ヲ寄附シ又尼院妙性寺ヲ興立セリト云伝フ、当寺何レノ頃廃セシヤ、今九尺三間ノ辨堂ニ釈迦ヲ安シ又鎮守堂アリ

妙性寺跡

南大門浄光寺蓮華院ノ東隣ノ地也、台宗或浄土又法相トモ云里俗ノ説ニ小松内府重盛公現当所願ノ為ニ寺ヲ建立ス開基ノ尼ヲ妙性尼ト云ヒ勤行高德ナリシガ干今時トシテ墳塋ノ中地底ニ説経ノ声アリト云、前ニ云ル鎮守ハ此寺ノ門番某ト云者性質直剛毅也、死シテ後里人ノ願望ヲ折テ驗アリ、賽ニ米ノ団子ヲ以テス廢跡ニ九尺四面ノ釈迦堂一字アリ、又里老ノ説ニ云上古景行帝ノ行宮ニ築地アリテ其後退転セシ所ニ重盛浄光妙性ノ二個寺ヲ建立アリシトモ云

これらの記事によれば、平安後期頃、平重盛が当国を知行して、父清盛の驕奢は日々その度を増し、皇室を悩まし無道の振舞が多く、ついには一族滅亡のあとを申う人もなかったの
で、ここに浄光、妙性の二箇寺を建立し、父母の悪行滅罪のため大五輪二基を建て衆僧を集めて常住念仏三昧の道場としたことがあげられている。またこの地がかつての景行帝行在所跡で、その昔四方に築地を築き、南に大門を設けたが朝夕にきける音が二里余りも距てた吉地山までもひびいたと見え、一説には鳥原まで聞えたとも伝えられている。これらがどの程度に信じてよいか大きな疑問のようであるが、巨大な規模の門であったことを意味するものと思う。南大門の名は推定される所在地付近の地名となって現在に及んでいる。

五輪塔二基は、再興された蓮華院誕生寺境内にそのままのすがたで現存するが、肥後国誌には次のように掲げられている。

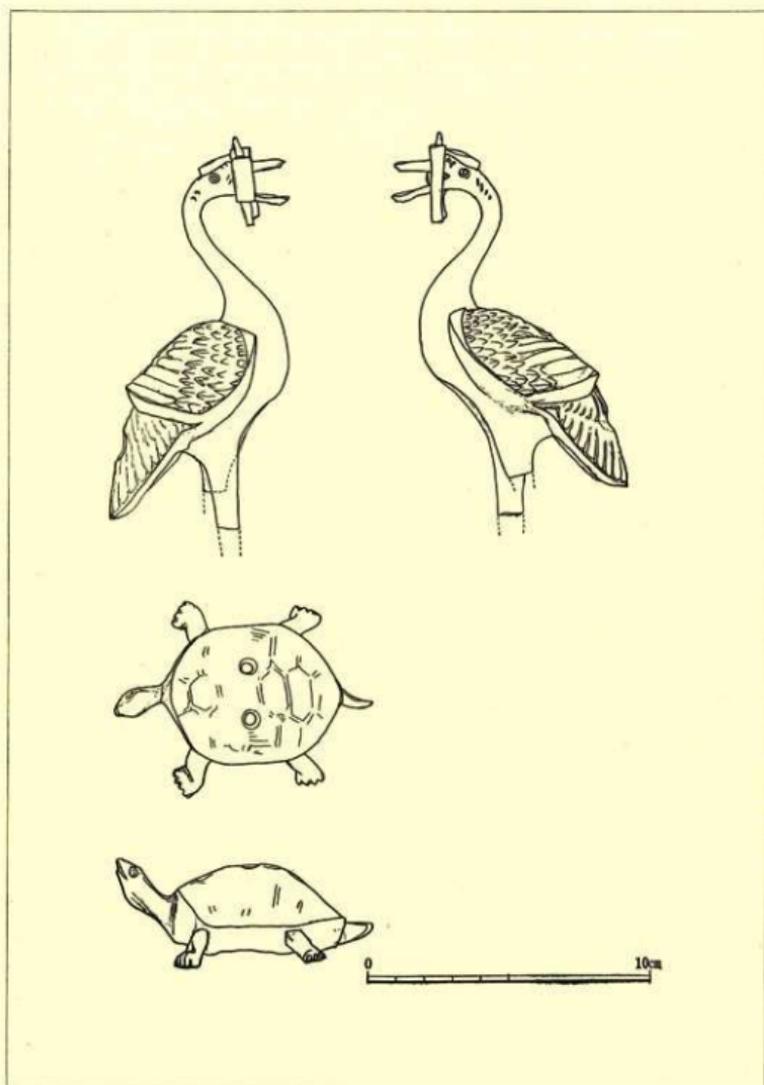
五輪塔 二基

何ニ由テカ世上ニハ関白塔ト云トモ里俗ノ口碑ニ存スル処ハ関白塔トハ云ハス説前ニ詳カナリ、此塔無銘高一丈一基ハ見ヘス浄光寺跡ノ林中ニアリ

南大門についても次の通りに出ているので、これも記して参考としたい。

南大門

関白屋敷ト云ヘル畠地ノ東端ヲ隔テ東ノ南大門村ト称ス、里俗ノ説ニ内府重盛此辺ニ築地ヲ築キ南大門ヲ設ケ西ニ蓮華院東ニハ尼寺ヲ建テ妙性寺ト号ス事ハ前ニ詳カナリ、此ノ時南大門ノ衛士某氣稟潔白剛毅ナリ、死後其靈奇異アル故今ニ祀テ有驗願望成就スレハ賽ニ米団子ヲ供ス、里俗農之レヲ鎮守ト称ス、此堂前ニテ下馬セザレハ必ス落テ頓ニ死スル者多シト云、一説腹赤村農夫ノ伝フル処ハ 景行帝当国巡狩ノ時此所ニ行宮ヲ建テ築地南大門等ヲ設ケタル跡ナル故南大門ノ前ヲ馬ニ乗通レハ必ス崇リ有テ今モ不慮ノ落馬シテ多クハ卒死スト



何レカ是否ヲ知ラス

浄光寺蓮華院は、以来天正年中までおよそ500年のあいだ八町八段の境内と七堂伽藍の規模をもって隣りの妙性尼寺と並んで大いに発展したが、その後天正争乱の戦火にかかって堂宇残らず焼失ともに寺も廃絶した。

昭和4年12月、河原は信大僧正はこの寺跡に高原山蓮華院誕生寺を興し、真言律宗を唱えて現在に及んでいる。

なお、廃跡に残っていた釈迦堂、鎮守堂の二堂宇は、昭和4年の再興工事に際して取り除かれ、釈迦堂本尊釈迦如来立像は大願堂へ移され、鎮守堂と見えるのは、土地の人は「おちすさん」の呼称で言いならされたかやぶきのお堂をいったものと思うが、本尊体は年々に取り代えられる御弊であったようである。

(2) 調査の対象として取扱ったもの

ア、昭和4年の出土品

A. 鶴亀燭台 3点 B. 小仏像 2鉢 C. 金銅香炉 1点

イ、昭和34年3月の出土品

布目瓦 多数ある中の施文のあるもの 5点

ウ、昭和38年12月の出土品

A. 金銅仏頭 1鉢 B. 滑石勾玉 1点 C. 瓦器、盤 1点

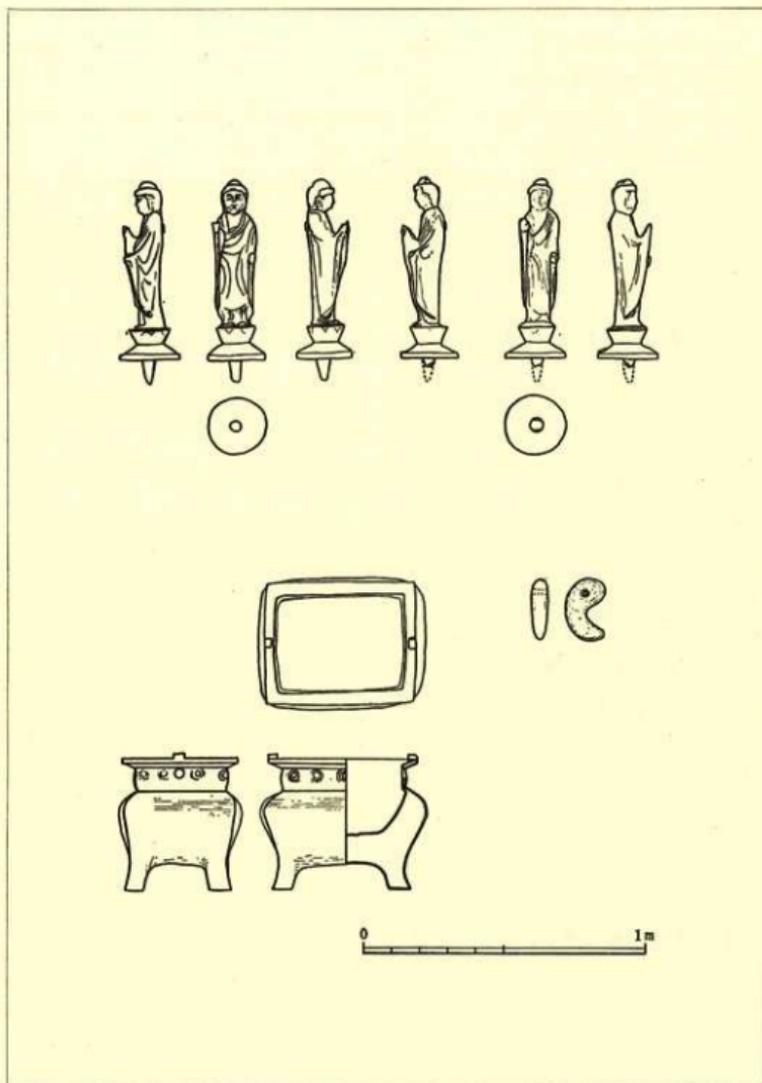
(3) 出土品の説明

イ、鶴亀燭台鶴部分 その1

真鍮製で、高さ25.5cm、胴体の長さ10cmの大きさになり、下くちばしの先端がわずか欠けている。頭をもたげるように上にあげ、長い首をちぢめて直立するすがたで、15mほどある長い足、長い首とくちばしというように鶴の特徴を巧みに作ってある。左足の根元に縦目とかしめ釘があるが、何を意味するものかわからない。足の先端は指を作らず、棒のようにして短かく尖らして、組み合わせる相手の亀の甲の二つの孔に装着する仕組みになっている。頭部と胴の上面に細かい羽毛の表現が美しく行きとどいて、鶴の写実を強めた中に半抽象の感じも見逃せず、仏前の壮嚴具にふさわしい形を整えあげている。

ロ、鶴亀燭台鶴部 その2

全面銅で作られているがもとは金箔で被われた見事なものであったろう。現在ははげ落ちて緑錆がふき出ている。両脚とも根元近くで欠損し、高さ13.5cm、胴の長さ9cmで前のよりやや小さくなる。大きく開いたくちばしの奥のほうに金具をくわえ、金具の右端に短い鉄釘をたてに取付けてローソクを立てるようにした形跡が認められる。頭と胴に羽毛の刻みが施されてい



る。全体の容姿はほとんど同じになっているが、羽毛の彫法はまったく異なる。仏具として、また金工々芸として見事なものである。

ハ、鶴亀燭台龜部分

かどの丸くなった六角形の甲の四方に四本の指を刻んだ手足をつけ、甲には亀甲型の模様を彫りつけ、上にもたげ突き出た頭と、わずかに左にふれた小さな尾によって動きをふくめた亀の姿を写実で捉え、巧みに表現した逸品である。長さ9.5cm、横6cm、甲の中央の二つの孔に鶴の両足先を着装して燭台とする。青銅で作られ、鍍金があったであろうがはげ落ちて認められない。

二、香炉（身）部分

金銅製の、蓋を失った香炉の身で、首の一部分に鍍金の名残りがかすかに認められる。中ふくらみになった縦6cm、横4.5cmの長四角形を呈し、すみを丸くした胴と、縦5cm・横4cm角をとった上縁との間の首のまわりに18個の渦文を等間隔に浮き彫りにして飾る。丸くふくれて外に張り出す胴は下になって内に向かい、四本に分れて脚となる。縁の両側に小さな突起があるが、蓋をつけた際のとめ金である。小さく、均斉のよくとれた優美な仏教美術の工芸品である。

ホ、金銅阿弥陀如来小立像 2軀

長い間地中に埋れていたにもかかわらず、ほとんど腐蝕もなく完全に残っている。湿気に堪える青銅であるからで、鍍金は剥落し緑錆に被われている。像高7cmの小さな銅像で、二段からなる頭部、顔面各部に至るまで細かに刻まれ、右手を上にあげて手のひらを前に向け、左手を前にさし出し、手のひらを上に向けた施無畏、与願印の如来形をとり、胸を露わにし、肩から両手、足首までからみつく法衣に簡略された衣文の刻みがついている。蓮弁を刻んだ円台の上にS字形に直立する端麗な容姿が小像ながら美しく感じとられる。

このような小像は鋳型によって大量に鋳造する場合が多く、信者の大願をかける献納仏・胎内仏・千体仏などいろいろあり、第2号仏とともにそうしたなかの一部である。

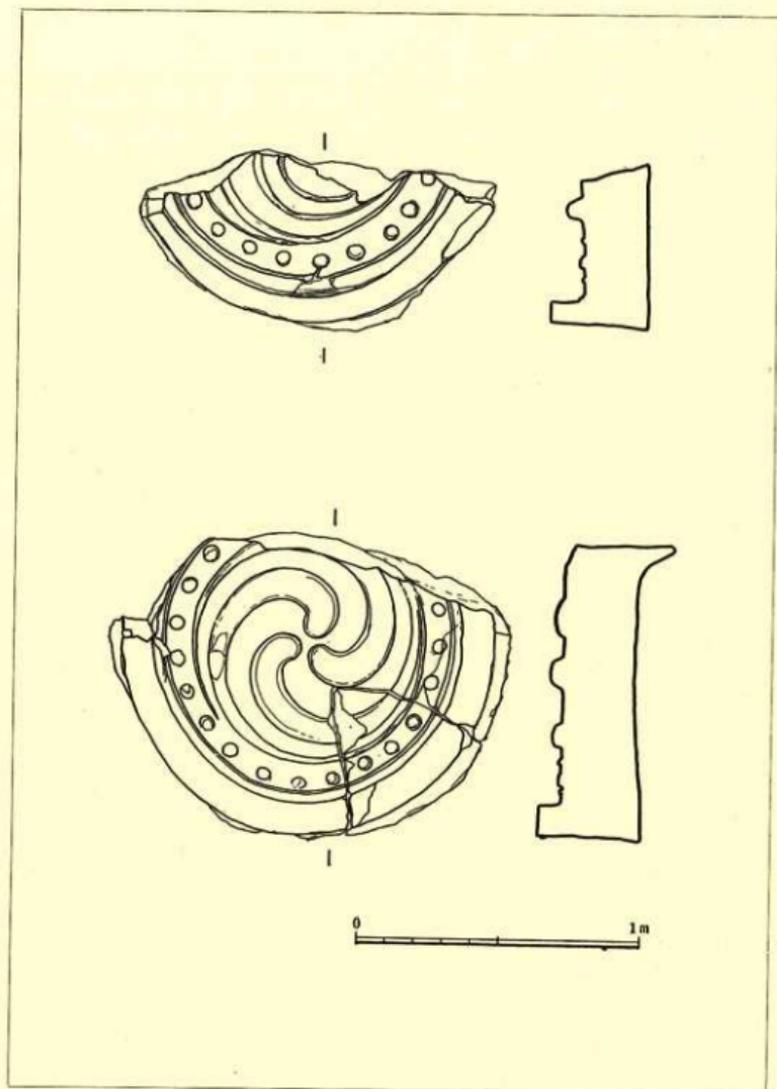
2軀共に同形同大であり、異なる点がなく、また同一地点より出土している。台座下に短い心棒があるので、もと木台にさしこんでとりつけたのであろう。

ヘ、布目瓦（軒丸瓦・軒平瓦）

A. 軒丸瓦 3点

出土した瓦群の中に文様のある軒丸瓦3点があり、何れも破片となっている。瓦の文様意匠、大きさは3点とも同じであり、復元した丸瓦の直径13cmの中心に頭の部分を集合させ、先端の鋭く尖った長い尾を左廻りに流し、先端は互いに触れ合うようにして径8cmの三つ巴を構成する。この外回りには、24個の珠文を連ねて三つ巴をとりかこみ、さらに幅1.2cm、高さおよそ1cmの凸帯をめぐらして全体をかこむ意匠となる。

第5圖 淨光寺蓮華院出土遺物(文様瓦1)



B. 軒平瓦 2点

2点とも破片となっているが、左から右へ走る唐草が浮き彫りされている。唐草の大きくゆるやかに浮き出た曲線の midpoint より分かれた枝が、先端を外がわにわらび手状に浅く巻き、交互左右に大きさを美しく変化させ、左より右へゆらぐようにくりかえす簡素な唐草文である。何れも瓦の右がわにかかる断面であるため、左右対称か一方連続か、全体の文様構成は分らない。

C. 瓦についての考案

玉名市築地西南大門宅地造成に際して、予定敷地の雑木林を伐採し開墾の土木工事にかかって箱式石棺・石塚墳・鍛鉄跡などが発見された。昭和38年3月一週間の期日をもって発掘調査を行った結果、新たに西南部の一廓から夥しい布目瓦の堆積群が発見された。この地点は浄光寺蓮華院の真南約150mの地点にあっている。方角、距離、瓦の出土およびその年代や、付近の地形、地名などを総合して考えてみると、浄光寺蓮華院の南大門跡であるということ以外に何物も思いあたらない。

ここから出土した夥しい瓦片の中から、年代判定のきめ手となる文様の入った瓦5点を抽出して調査の対象とした。

飛鳥時代に、仏教に次いで伝来した本瓦葺木造建築は最初は寺院に採用されたが、奈良時代になると宮殿、役所、貴族の邸宅等に及び、屋根に葺く瓦に半蓮弁、復蓮弁、忍冬唐草文など逞ましく荘麗たものが用いられた。これが、平安時代になり地方の寺院建築が多くなるにつれ地方的に変形退化し、寺自体の趣向におちいって迫力の弱々しいものになり、ついにはなくなってしまい鎌倉時代頃にこれに代って巴文が現れた。主として軒丸瓦にこの文様をつけたためこれを巴瓦というようになった。江戸時代になると商家・民家に波及して大正時代に及んだ。

浄光寺蓮華院南大門跡出土の巴文唐草入瓦は鎌倉時代創始期のものと推定されるが、このことは寺院、寺門の建立時代と共通する。

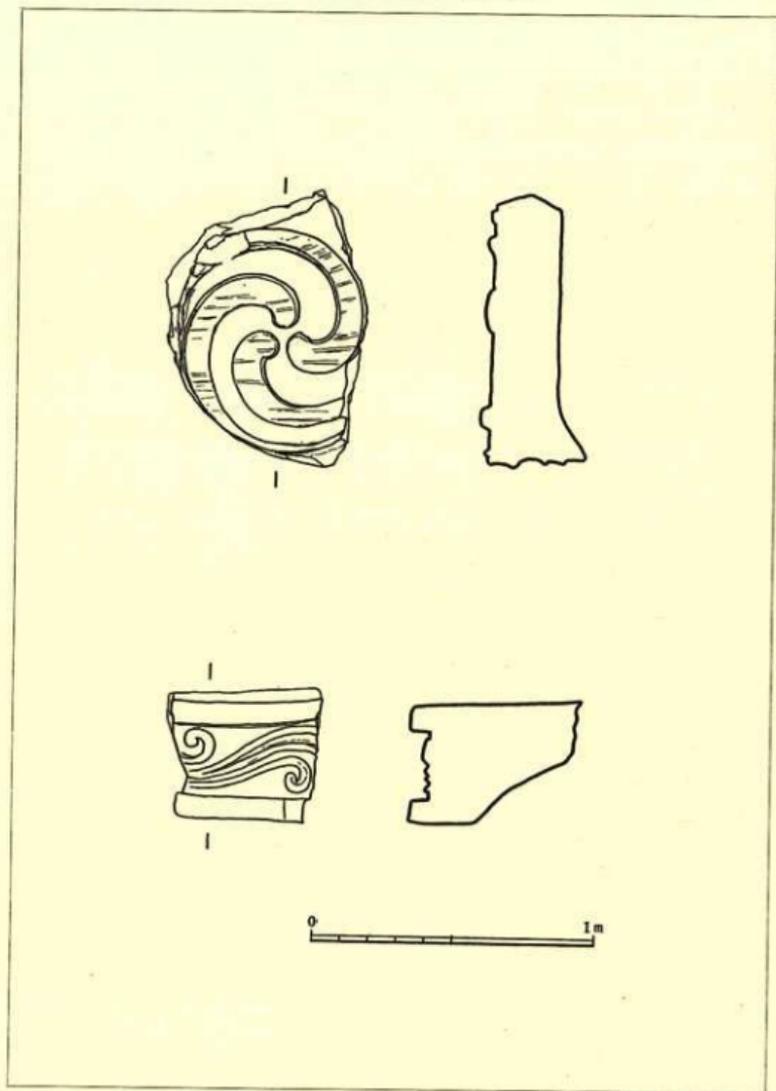
ト、金銅仏頭

首と胴体とのつけ根の箇所から欠けた如来形の頭部である。昭和48年12月、現在の本堂を建立するため敷地造成工事に際して発見され、昭和4年の出土品と一連の鎮壇具である。像高9cm、横張りの最大部分が8cmという小さい仏像である。青銅鑄造で一ぱいの緑錆に被われているが、もと金箔さん然と光っていたであろう。大きく開いた眉の弧線、二股に分れた螺髪的美丽い並びと深い彫り、童顔の豊かな頬、半分開いて下を見つめている慈愛のまなざし、W字型に結んだ口元に微笑を浮かべたまことに優れた彫刻作品で、平安後期の特徴をそのままに伝えている。

頭と頭の中はどと後頭部の一つずつ、大きさの割に誇張的に設けられた孔がある。白豪の水品と肉髻としての瑪瑙玉のとれたあとであり、後頭部の孔は、光背の外れたあとの孔である

第6圖

淨光寺蓮華院出土遺物(文様瓦2)



う。

チ、勾 玉

滑石で整形し、軽く磨いた普通の形の勾玉である。頭を中心にひもを通す孔一つがある。さ2.2cm、厚さ最大部で0.7cm、美しく整った形をしている。

日本の勾玉は縄文時代に始まり、弥生時代を経て古墳後期に最盛期に達するのであるが、多くは硬玉、翡翠、碧玉、琥珀、瑪瑙、水晶等の高級石で造られているが、中には粗悪な土製品が代用された例も少くないようである。勾玉は胸や首を飾る装身具最高のものとしてたつとばれたが、仏教伝来後もなおおとろえず、仏像の装身具として宝冠・璎珞や、仏殿の荘厳具に飾りつけられた。

浄光寺跡出土の勾玉もその一つで、はじめ仏像に飾られたが、後に鎮壇具の中に加えて、土中に埋められたものと考えられる。鎮壇具とは、仏殿の建立にあたり本尊下の地中に収めて、工事の無事とその後の繁栄を祈るための宝物類をいう。

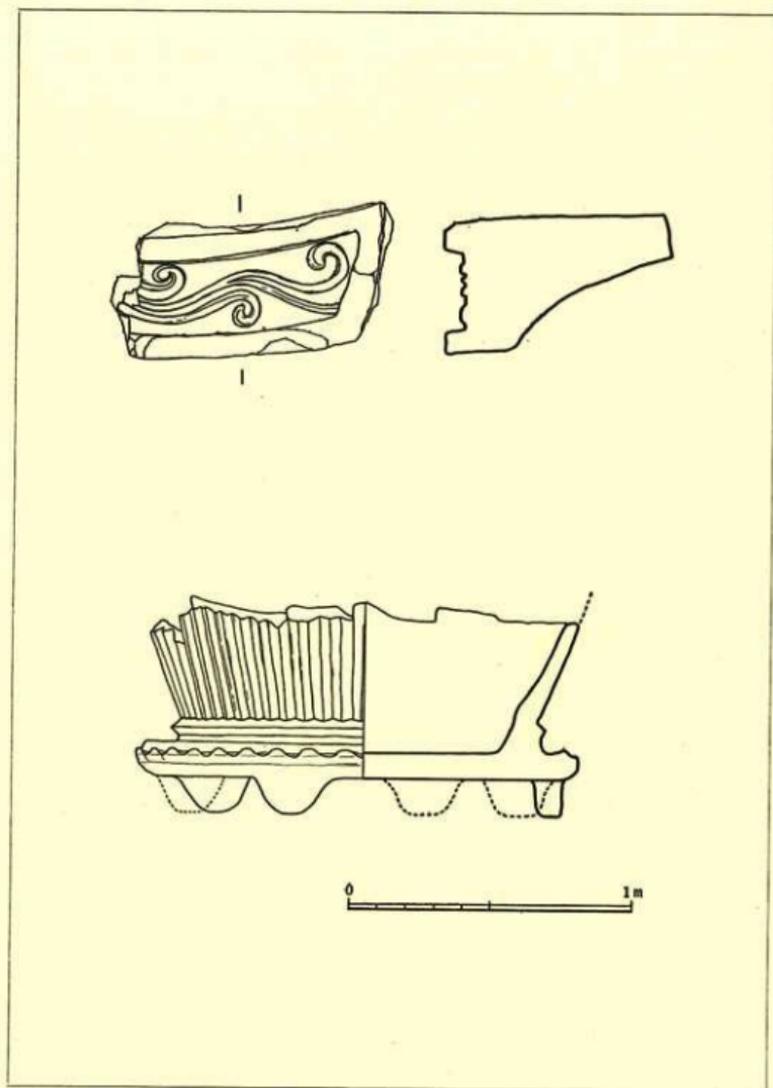
リ、瓦 器 盤

断片が一群となって出土した。接合、復元した結果、全体の半分程度にまとまった。破損した陶器で、半分と口縁全部が失われている。現状のままの高さ15cm、最大部の直径31.6cm、深さ10.2cmの大きさである。丸型の平たい底の中段に上に開かせ、三角棒を縦に並べフリーティングの効果をねらい、底と体と接合する外がわに同様の三角凸帯を一本めぐらして変化をつくり、底の平板は一と際外側に突出させ、大きな波状文を浮き出して飾る。丸く下に突出した脚が一つついている。他に欠けた痕跡もなく、もと3本あったのか、また四本あったのか分らない。直線を主にし、浅い曲線を加味して構成された器形がまことにあざやかである。

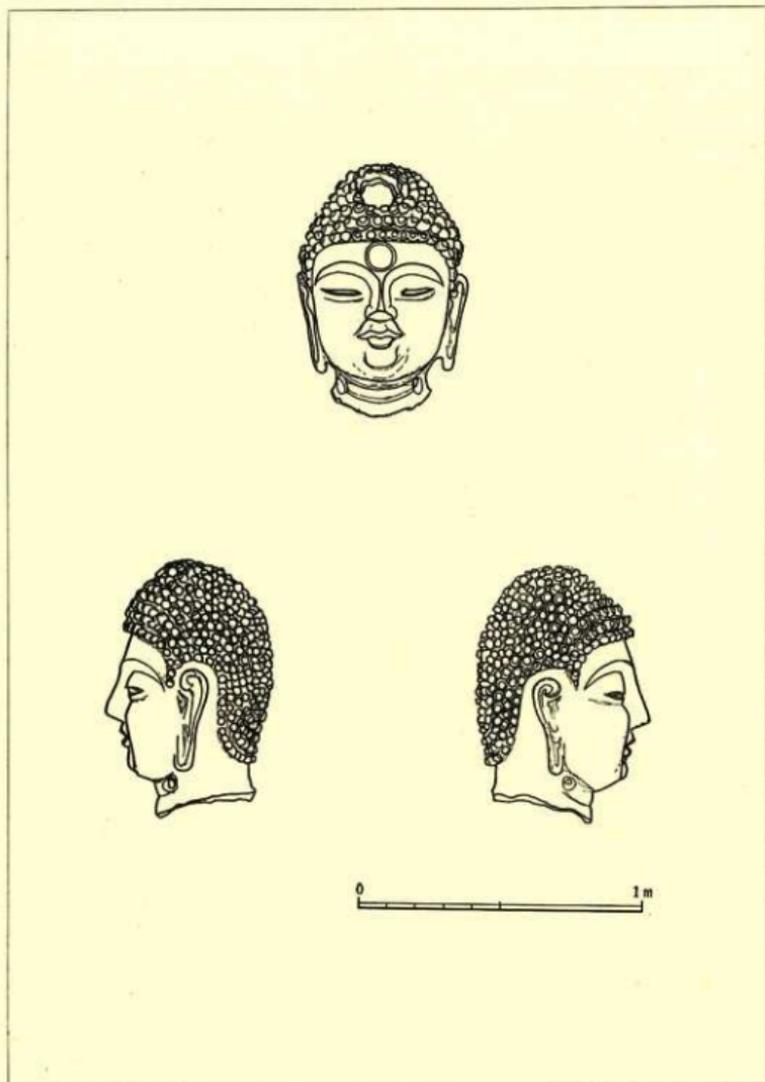
鎌倉時代になって瓦器と呼ばれる新しい質の土器が出現し盛んに使われるようになった。食器・生活火器・水容器など種類は多く、主として上流階級の人々の間に使用されたようである。この盤もその一つで、中国北宋時代頃より金属器・石製品・陶器等に造られ、王侯・僧侶の間に使用されたようであるが、それがわが国へも伝わり、造られるようになった。浄光寺出土の盤は、鎮壇具の出土地点から20m西の深い溝にかかる下層より幾つかの石塊とともに発見されているため別個のものであることは明らかで、当寺住僧が平素使った手水容器であると考えられる。

無駄な装飾を省き、極めて簡素に造られている点、瓦器としての形体にふさわしく、また時代をそのまま反映したのものであると思われる。

第7図 浄光寺蓮華院出土遺物（文様瓦と瓦器）



第8圖 淨光寺蓮華院出土遺物(金銅仏頭1軀)



(4) 調査を終って

浄光寺蓮華院の存在については土地の人々には早く知られていた。天正戦乱にかかり焼失後は誰もその跡をかえりみる者もなく荒れ果てて竹・雑木の茂るにまかせ、俗に「おちつさん」と呼ばれる草堂と、「お釈迦さん」と呼ばれる瓦葺きの堂宇と、子供たちは「はんばくさん」おとなたちは「かんばくさん」と呼んでいる大五輪塔婆二基が密林の中にさびしく残っていた。この塔の苔をいただいて服用すれば、熱病に大効ありというので、親たちが苔をけづってきて飲ませてくれた幼少の頃のことを思い出す。どの程度のききめがあったか分らないが、多くの人たちにけづられ、ついに苔も生えずただ刀痕だけが全面を被うていた。

大正6・7年頃築山小学校長をしておられた井前初次郎氏は、郷土史研究に情熱を燃やし、築山地方の古い歴史を調べられた折に、幾度かこの寺跡を踏査された。どの程度の調査であったか知る由もないが、釈迦堂本尊は後醍醐天皇御作だと言っておられたということを聞いている。事実は間違っているにしても、早くから研究家のあいだの関心の的となっていたようである。

昭和3年頃から現当主川原是信大僧正を中心に寺跡再興の問題が盛り上り、ついにはそれが一村挙げての協力態勢のもとに事業は着々進められ、昭和4年度には一応新寺院としての体裁を整え、およそ350年間に及んだ寂寥たる廃墟はここによりみがえった。関白塔といわれる大五輪塔は昔のままこの境内に偉容を誇っている。

おちつさんと呼ばれた草堂の位置が旧本堂のあったところと伝えられていた。開墾当時本尊は付近の民家に遷座されたが、九尺四面の小堂で出土の鎮壇具のすべてがこの堂の地下に埋められていた。

この頃から村道改善の声が高まり、遺跡の中心に新道が開通、続いて新寺院の次々拡張工事、民家の新築等の工事が進み、寺跡一帯は見るかげもなく変貌して、遺跡としての価値は「無」に等しくなってしまった。

戦後、県下の各地で寺院跡発掘調査が行なわれてきたが、出土品の多くは瓦・礎石とわずかばかりの土器類で、金属荘厳具の出土をみたのは浄光寺蓮華院だけである。それだけにこの出土品は貴重とするものである。平安後期以降の仏教美術と工芸文化の様相、あわせて当寺院の歴史を研究する上の大きな手がかりとなるものであろう。今後保存に十分の意を払い学術資料に役立てたい。

(田 添 夏 喜)

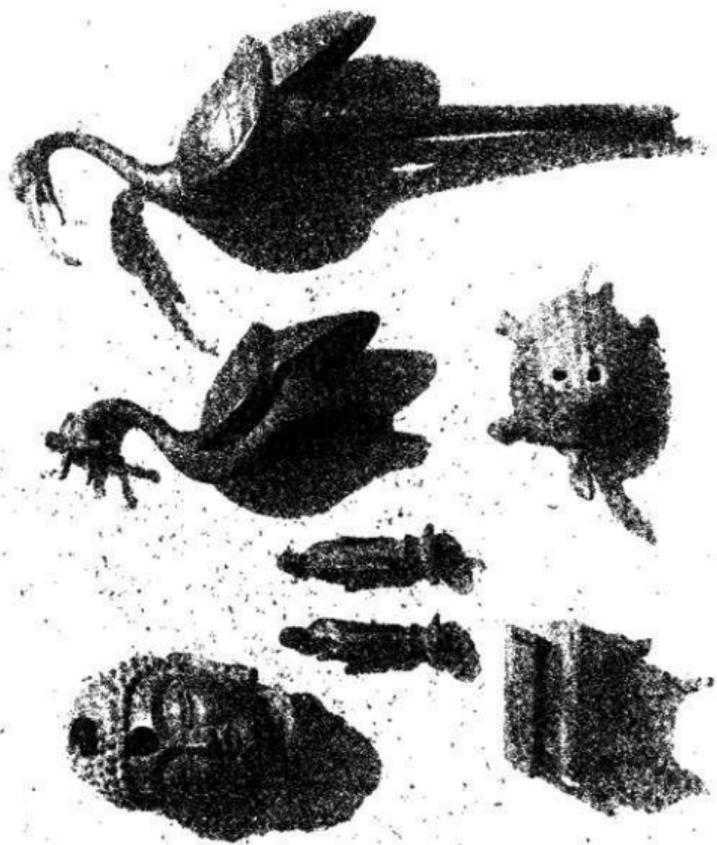


(上) 現在の蓮華院誕生寺本堂



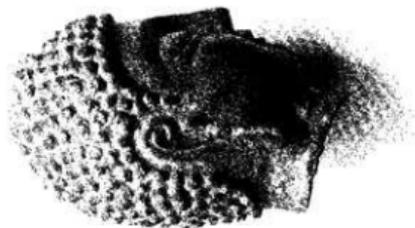
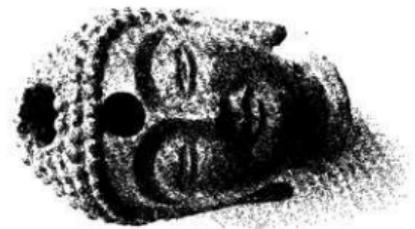
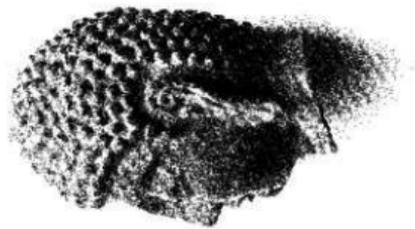
(下) 浄光寺蓮華院五輪塔 (開白塔)

図版42 浄光寺蓮華院境内出土遺物



出土した仏具類

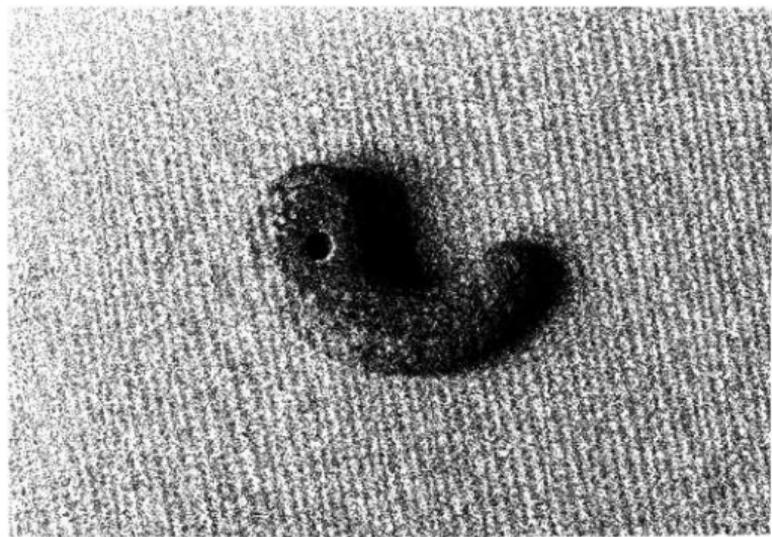
図版43 浄光寺蓮華院境内出土遺物



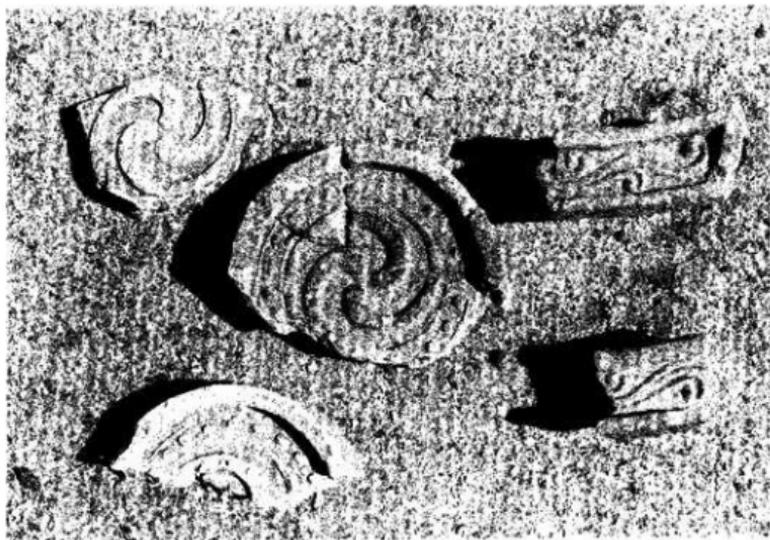
金剛仏頭1 身体



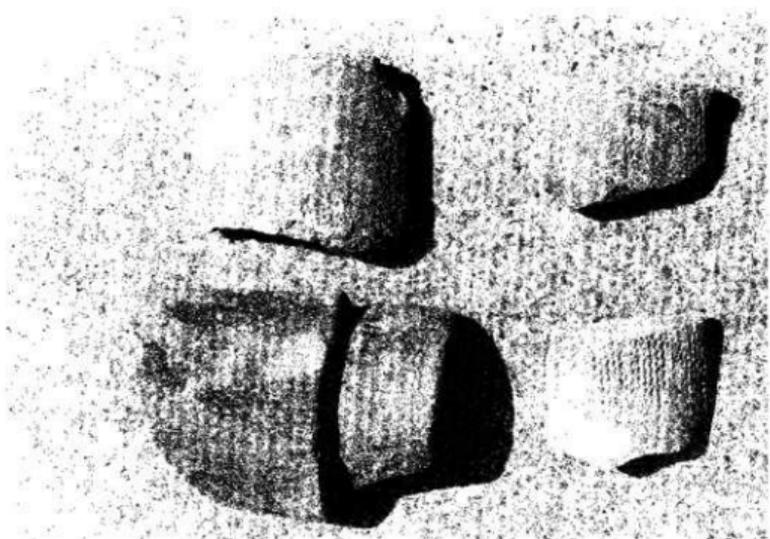
(上) 小仏像 2 尊



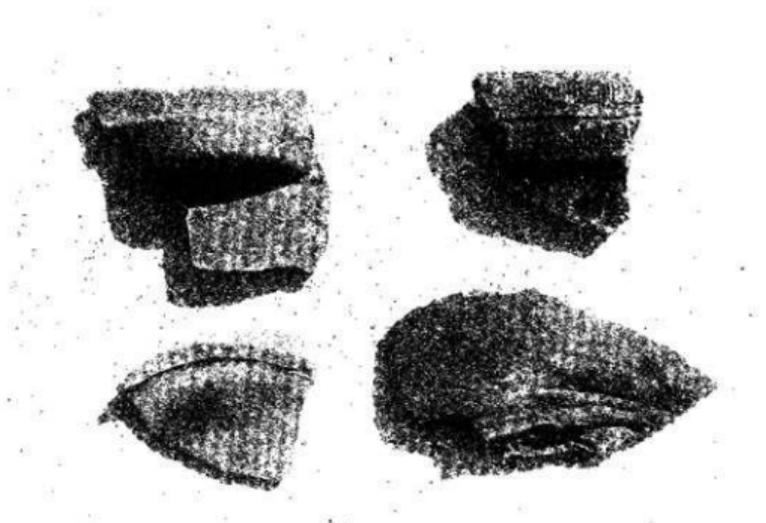
(下) 滑石製勾玉 1 点



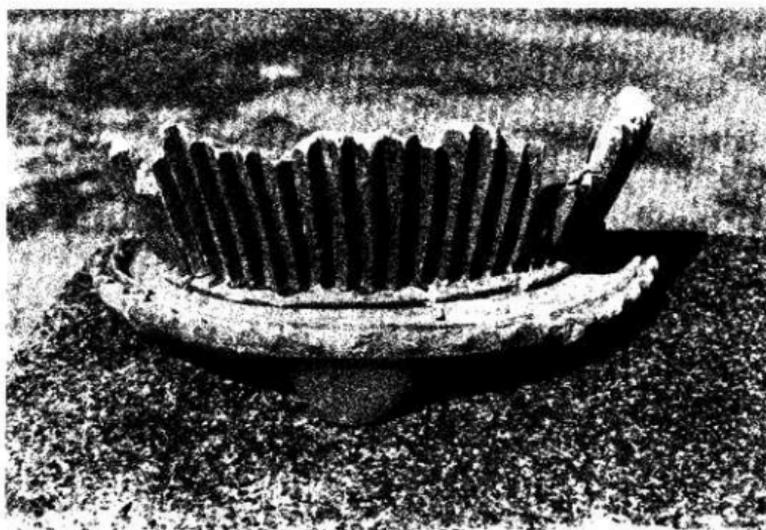
(上) 軒丸瓦と軒平丸瓦



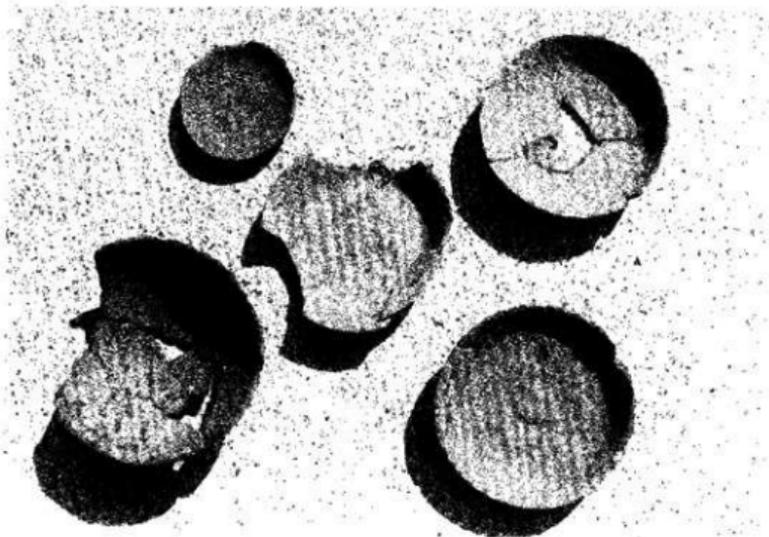
(下) 丸瓦と平瓦片



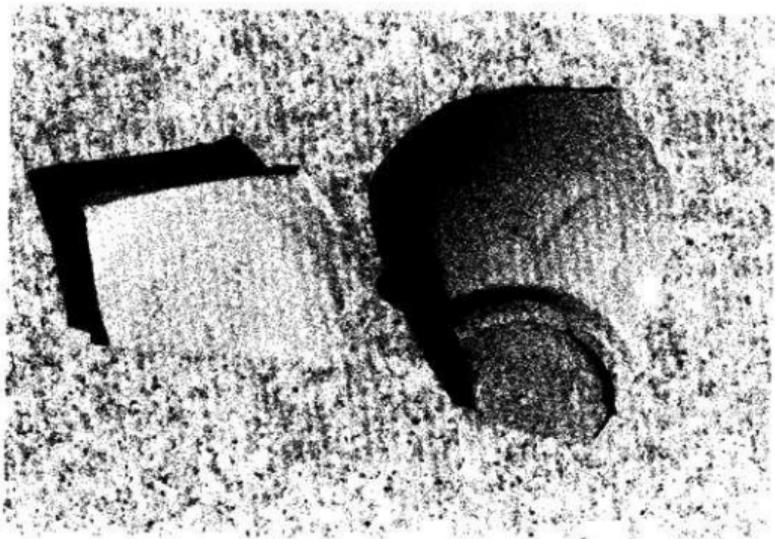
(上) 互質火鉢の口縁部と同底部



(下) 互質の鉢



(上) 土師質土器 (燈明瓶)



(下) 青磁の白磁碗片

玉名市文化財調査報告 第5集

浄光寺蓮華院跡出土品

昭和56年3月

発行 玉名市教育委員会
玉名市繁根木88-1

印刷 株式会社 秀 巧 社
熊本市国府4丁目10-18

